



NICHOLAS SPARKS

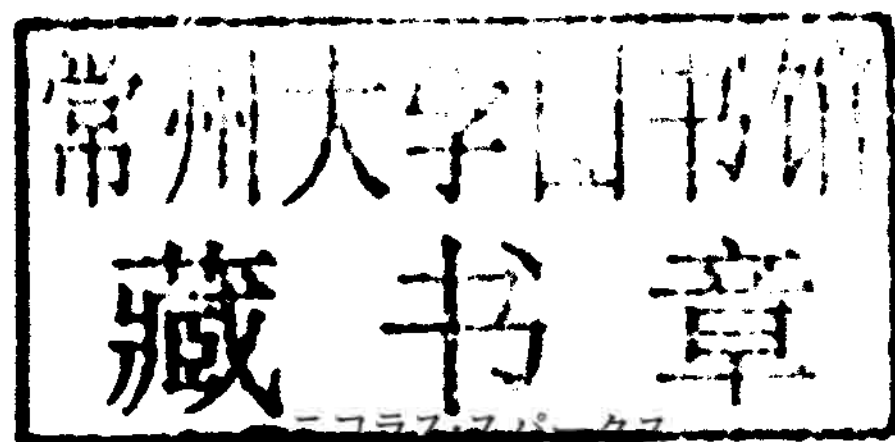
TRANSLATION BY AKIKO OONO



ニコラス・スパークス
大野晶子＝訳

メッセージ・
イン・
ア・ボトル

MESSAGE
IN A BOTTLE



メッセージ・イン・ア・ボトル

ソフトバンク文庫



メッセージ・イン・ア・ボトル

2011年 12月25日 初版第 1 刷発行

著者	ニコラス・スパークス
訳者	おおの あきこ 大野晶子
発行者	新田光敏
発行所	ソフトバンク クリエイティブ株式会社 〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5 電話03-5549-1201 (営業部)
印刷・製本	中央精版印刷株式会社
装丁	株式会社アルビレオ
フォーマット・デザイン	モリサキデザイン
写真	©Halfdark/fStop/amanaimages ©Nina Subin
本文組版	アーティザンカンパニー株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。

定価は、カバーに記載されております。

本書に関するご質問は、小社クロスコンテンツ事業室まで書面にてお願いいたします。

ニコラス・スパークス
メッセージ・イン・ア・ボトル

ソフトバンク文庫



MESSAGE IN A BOTTLE
BY
NICHOLAS SPARKS

COPYRIGHT © 1998 BY NICHOLAS SPARKS

THIS EDITION PUBLISHED BY ARRANGEMENT WITH GRAND CENTRAL PUBLISHING,
NEW YORK, NEW YORK, USA THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.
ALL RIGHTS RESERVED.

マイルズとライアンに

プロローグ

ある暖かな夏の夜、その瓶は船から海中へと投げ込まれた。雨が降りはじめ数時間ほど前のこと。どんなものであれ、瓶というのは壊れやすい。一メートル上から地面に落とせば、割れてしまう。しかし、きちんと封をしたうえで、海に投げ込めば——まさにそのときの瓶のように——この世のなによりたやすく航海できる。ハリケーンが来ようが、トロピカル・ストームに襲われようが、なにごともしなかつたかのように、浮いていられる。もつとも危険な離岸流に乗ったとしても、海面でぶかぶかしているだけだ。だからある意味、そのなかにメッセージ——なにかの約束を果たすためのメッセージを入れて運ぶには、うってつけの入れ物となる。

気まぐれな大海原に取り残された瓶は、どれも例外なく、予測のつかないコースをたどる。瓶が向かう方角を決定づけるのは、風と海流だ。嵐やそれが生み出した漂流物もまた、瓶のコースに影響する。ときには漁師が放つ網に引っかかり、それまでとは正反対の方角

に何十キロも運ばれてしまう。だから同時に海へ落とした二本の瓶が、まったくべつの大
陸で、あるいは地球の表と裏で発見されることもある。瓶がたどるルートを推しはかるの
は不可能だ。それが、瓶に秘められたミステリーのひとつとなる。

この世に瓶が登場して以来、そのミステリーが人々の好奇心をかき立ててきた。そして、
そのミステリーを解明しようとする人間も、少なくない。たとえば一九二九年、ドイツの
ある科学者グループが、一本の瓶がたどる旅路の調査に乗り出した。発見者宛てに、打ち
上げられた場所を記録したあとでまた海に投げ込んでほしい、というメモを入れた瓶を、
南インド洋に落としたのだ。一九三五年までに、瓶は世界じゅうを漂流し、約二万六千キ
ロも旅することになった。正式に記録されたものとしては最長距離だ。

瓶に託されたメッセージの歴史は、何世紀も前にさかのぼる。そのなかには、歴史的著
名人の名前もいくつか登場する。たとえばベンジャミン・フランクリンは、一七〇〇年代
半ば、アメリカ東海岸沖の海流の情報を集めるため、瓶に入れたメッセージを利用した
——そのとき得られた情報は、いまだに活用されている。アメリカ海軍では、いま現在も
潮の満ち引きや海流を調べるため、瓶を利用している。また、事故による石油流出の方向
を追跡するために使われることも多い。

いままで海に流されたメッセージのなかでもっとも有名なのは、一七八四年、若き船員
マツヤマ・チュウノスケによるものだ。彼の乗った船が珊瑚に座礁して難破し、やがて食
料が底をついた。死ぬ前、彼は事件の顛末を木片に刻み、それを瓶に入れ、封をした。一

九三五年、つまり海に漂流しはじめてからじつに百五十年が過ぎたのち、その瓶はマツヤマの生まれ故郷である日本の小さな海辺の村に打ち上げられたのである。

その暖かな夏の夜、海に落とされた瓶のなかのメッセージは、船の難破を伝えるものでも、海図を描くためのものでもなかった。しかしそこに含まれたメッセージは、のちにふたりの人間の人生を永遠に変えることになる。そうでなければ、決して出逢うことのなかったふたりの人生を。だからそれは、運命のメッセージと呼ぶべきだろう。その瓶は、メキシコ湾上空に停滞する高気圧の風に吹かれ、六日間にわたって北東へ進んだ。七日目に風がやむと、瓶はまっすぐ東に針路を取りはじめる。やがてメキシコ湾流に乗り、速度を上げ、一日に百十三キロ近くのスPEEDで北へ移動しはじめた。

海に落とされてから二週間と数日後、瓶はいかわらずメキシコ湾流に乗っていた。しかし十七日目、またべつの嵐——今度は大西洋の中央あたりで発生した——の強い東風にあおられ、海流からはずれ、ニューイングランドめざして漂流をはじめた。メキシコ湾流の勢いを失ったいま、瓶はふたたび速度を落とし、マサチューセッツの岸辺あたりを五日間にわたってジグザグと動きまわったあと、ジョン・ヘインズが投げた網に引っかかった。ぴくぴくと跳ねる何百匹もの魚のなかにその瓶を見つけたヘインズは、それを脇にぽいと放り、漁の成果に目を戻した。幸い瓶は割れずにすんだが、ヘインズの頭からはたちまち忘れ去られ、その日の午後から夜にかけて、船首のあたりに放っておかれることになる。

そのあいだ、船はケープ・コッド湾へと向かっていた。夜の八時半になって——船が無事、湾に戻ったあと——煙草をふかしていたヘインズが、ふたたび瓶に目をとめた。しかし、すでに陽が落ちていたために、彼は瓶を掲げてはみたものの、その中身には気づかなかった。彼はそれ以上、目を凝らすこともせず、瓶を船の外に放り投げた。そのおかげで、瓶は沿岸に並ぶ小さな町のひとつに打ち上げられる運命となったのだ。

もつとも、すぐに打ち上げられたわけではない。それから数日間、瓶は行ったり来たりしながら、ぷかぷかと漂っていた——どちらに向かおうかと迷っているかのように。そしてようやく、チャタムという町の近くの浜辺に打ち上げられたのだ。

そこが終点だった。二十六日間という時間と千百八十八キロという距離を漂ったあと、瓶はついに旅を終えたのだ。

十二月の凍^シえるような風が吹きすさぶなか、テレサ・オズボーンは腕を組み、海を見つめていた。ここに着いたときには、浜辺を散歩する人の姿がちらほらとあった。しかし、雲行きがあやしくなったことに気づき、人々はとうの昔に姿を消していた。浜辺でひとりぼっちになった彼女は、あたりを見まわした。空の色を映す海。まるで溶けた鉄のようだ。浜には絶え間なく波が押し寄せている。雲が、重く、ゆっくりと垂れ込めてくる。濃度を増しつつある霧が、水平線を視界から消し去った。もし時と場合がちがえば、周囲に広がる荘嚴な美を満喫できたことだろう。しかしそのとき浜辺に立っていたテレサは、なにも感じていなかった。自分がいまそこに存在しているとも思えなかった。なにもかも、夢にすぎないような気がしていた。

9
彼女が車でここにやって来たのは、その日の朝のことだ。もっとも、途中のドライブのことなど、ほとんどおぼえていない。ここに来ようと決めたときは、一泊するつもりだっ

た。泊まる場所も確保しておいたし、ボストンから離れて静かな夜を過ごすことを楽しみにすらしていた。だが、海水が渦を巻き、激しく岸を洗う光景を目にしているうちに、そんな気分ではなくなってきた。用事がすんだら、さっさと家に帰ろう。どんなに遅くなろうとも。

ようやく意を決すると、テレサは波打ち際に向かってゆつくりと歩き出した。腕のなかには、その日の朝、慎重に荷造りした鞆を抱えている。忘れ物がないことは、きちんと確認済みだった。持参した品物のことも、自分がこれからなにをするつもりなのかということも、誰にも話していなかった。クリスマスの買い物に出かけてくる、とだけ言い残してきたのだ。完璧な言い訳だ。ほんとうのことを話せば、みんな理解してくれることはわかっていた。しかし、今回の旅は誰にも知られたくなかった。はじまりもひとりだったのだから、終わりのひとりでも迎えたかった。

テレサはため息をもらし、時計を確認した。すぐに満潮になる。そのときには、最後の準備が整うはずだ。小高い砂丘にすわり心地こちのよさそうな場所を見つけると、腰を下ろし、鞆を開いた。なかをまさぐり、さがしていた封筒を見つける。深く息を吸ったあと、ゆつくりと封を開けた。

そこには、三通の手紙がていねいに折りたたまれて入っていた。数えきれないくらい、何度も読み返した手紙だ。砂にすわったまま、彼女は目の前に掲げた三通の手紙を、まじまじと見つめた。

鞆には、ほかにも荷物が入っていた。しかし、そちらはまだ目にする気分にはなれず、目の前の手紙をひたすら見つめた。彼は万年筆でその手紙を書いていた。あちらこちらにインクの染みができている。右上の隅に帆船の模様が入った便せんも、ところどころ変色していた。時間の経過とともに、徐々に色あせていったのだ。いつの日か、文面が読めなくなる日が訪れるのはわかっている。しかしできることなら、きょうを境に読みたいと思わずにいられますようにと、テレサは願った。

読み終わると、彼女は取り出したときと同じように慎重な手つきで、手紙を封筒に戻した。その封筒を鞆に戻したあと、ふたたび浜辺に目をやった。彼女が腰を下ろす位置から、すべてがはじまった場所が見えた。

あの日、テレサは夜明けとともにジョギングに出かけていた。あの夏の朝のことは、いまでもはつきりと思い出すことができる。美しい一日のはじまりだった。彼女はあたりの景色を楽しみながら、アジサシの甲高い鳴き声と、砂浜に押し寄せては重なる穏やかな波の音に耳を澄ましていた。バカンスの最中ではあったが、浜辺で左右に目を配らなくてもすむよう、早朝から起き出して、走ることにしたのだ。あと数時間もすれば浜辺には観光客が押し寄せ、陽射しをたっぷり吸収しようと、暑いニューイングランドの太陽の下、タオルを敷いて寝そべりはじめるはずだ。ケープ・コッドは、一年のうちでもつねに混雑するシーズンに入っていた。しかしほとんどの観光客は朝の目ざめがゆっくりなので、テレ

サは、引き潮が残していった、固く、なめらかな砂の感触を楽しみながら走ることができた。自宅近くの歩道とはちがい、砂は適度に沈んでくれる。おかげで、セメントの道を走ったあとでときおり感じるようなひざの痛みも、心配せずにすんだ。

ジョギングは昔から好きだった。高校時代、田舎道や競技場を走っていたことがきつかけで、そんな習慣がついたのだ。いまさら人と競争しようなどとは思わないし、タイムを計ることもめったにしなくなったが、いまの彼女にとって、走っているときというのは、自分ひとりの考えに浸ることができる数少ない機会のひとつとなっていた。彼女はそれを、瞑想のようなものだと考えていた。だからこそ、ひとりで走るのが好きなのだ。彼女には、グループで走ろうとする人間が、どうしても理解できなかった。

息子のケヴィンのことは愛していたが、いまは彼と一緒にいるのがあるがたかった。どんな母親にも、ときには休暇が必要だ。ここにいるあいだはのんびり過ごせると思うと、うれしかった。夜、サッカーの試合もなければ、水泳大会もない。背後でがなりたてるMTVもなければ、手伝ってやる宿題もないし、こむら返りを起こして苦しむ息子をなだめるため、真夜中に起き出すこともない。三日前、彼女は息子を空港まで送り届けていた。彼の父親——彼女の元夫——が暮らすカリフォルニア行きの飛行機に乗せるためだ。彼女が口にするまで、ケヴィンは彼女に行ってきますの抱擁も、キスもしていないことに気づきもしなかった。「ごめんよ、母さん」ケヴィンはそう言うと、テレサに腕をまわし、キスをした。「愛してる。でもぼくのことばかり考えてちゃだめだよ、わかった？」そのあ

と、くると背中を向けると、ケヴィンは係員にチケットを渡し、ちらりと振り返ることもなく、はずむような足取りで飛行機のなかへと姿を消してしまった。

テレサはそんな息子を責めるつもりはなかった。十二歳の彼は、人前で母親を抱きしめたり、キスしたりするのを「カッコ悪い」と思う、むずかしい年頃なのだ。それに、彼の頭はすでにべつのところにあつた。今年のクリスマス以来、ケヴィンはその旅行を指折り数えて待っていた。父親と一緒にグランド・キャニオンに出かけ、一週間かけてコロラド川を筏で下り、最後はデイズニーランドで遊ぶ——子どもにしてみれば、夢のような旅だった。そしてテレサも、息子のためにうれしく思っていた。六週間も会えなくなるとはいえ、ケヴィンが父親と一緒に過ごせるのはすばらしいことのはずだ。

三年前に離婚して以来、彼女とデイヴィッドは比較的良好な関係を保ってきた。デイヴィッドは、最高の夫とはいかなかったが、ケヴィンにとつてはいい父親だった。バースデイ・カードやクリスマス・プレゼントを送り忘れたことは一度もないし、毎週のように電話をよこし、年に数回は、息子と一緒に週末を過ごすだけのために大陸を横断してやって来る。そしてもちろん、法廷命令として言い渡された滞在期間——夏の六週間、一年おきのクリスマス、そして学校が一週間休みになるイースター休暇についても、忘れたことはなかった。デイヴィッドの新しい妻アネットは、自分の赤ん坊のことで手いっぱいではあった。それでもケヴィンは彼女のことをとても気に入っており、家に戻ったとき、腹を立てていたり、無視されたと落ち込んでいたりしたことなど、一度もない。それどころか、

いつもその滞在期間のことを夢中になってしゃべり、すごく楽しかった、と言うのだ。そんな息子を見て、テレサは嫉妬心を燃やしたこともあった。しかしケヴィンにだけはそんな気持ちを悟られないよう、懸命に隠していた。

いま、浜辺でジョギングする彼女は、適度な速度を保っていた。彼女が走り終えるまで、ディアナは朝食をとらずに待っているはずだ——ブライアンがすでに出かけているのは、わかっていた。テレサは、ディアナと過ごす今回のバカンスを楽しみにしていた。ディアナとブライアンは年輩の夫婦だが——ふたりとも六十近い——テレサにとって、ディアナはいちばんの親友だった。

テレサが働く新聞社の編集長を務めるディアナは、もう何年も前から夫のブライアンとともにケープ・コッドを訪れるようになっていた。滞在先はいつも変わらずヘイリッシュャー・ハウスだった。ディアナは、ケヴィンが夏休みのあいだ、カリフォルニアにいる父親のもとでしばらく過ごすことを知ると、テレサも一緒に来るよう強く誘ったのだった。「ブライアンだったら、あっちに行くと毎日のようにゴルフに出かけちゃうんだから」と彼女は言った。「それに、ほかになにかすることでもあるの？ たまにはあのアパートメントから出なきゃだめよ」テレサにも、ディアナの意見はもっともに思えた。そこで何日か考えた末、ようやく行くことに決めたのだ。「すごくうれしいわ」ディアナは勝ち誇ったような顔で言った。「あなたも、あそこがぜったい気に入るはずよ」

テレサも、そこがバカンスを過ごすのにうってつけの場所であることは、認めざるをえ